第１回向日町競輪事業外部有識者会議　議事概要

○日　時：令和４年７月１１日（月）　１４：３０～１６：１０
○場　所：向日町競輪場　選手管理センター　３階３０５会議室
○出席者：川勝座長、岡﨑委員、奥野委員、小長谷委員、徳廣委員、山本委員

＜委員紹介、座長の互選＞
　委員紹介後、委員の互選により川勝委員を座長に選出

＜議事＞
(1) 向日町競輪事業の状況について
　　「資料２」に基づき、京都府から説明

(2) これまでの経過について
　　「資料３」に基づき、京都府から説明

(3) 意見交換
（川勝座長）
　説明の中でも御紹介いただきましたが、事前に皆様にお配りした資料の中に、今年３月の包括外部監査の報告書があるかと思います。その一部を今回御紹介いただいた訳ですが、近年の、向日町競輪事業を取り巻く環境、とりわけ、その経営状況が大きく変化している。一時は、廃止もやむなしというような報告もありましたが、近年の動向を見ると、その判断も見直す必要性もあるのではないかというメッセージが、包括外部監査の報告書の中では、かなり緻密な調査・分析に基づいて示されています。
　包括外部監査の報告書には、競輪事業に詳しい方にとっては、当たり前のこともたくさん載っているのかもしれないのですが、これまで競輪自体には全く接点がなかった私自身にとっては、専門である地方財政、あるいは公共政策という観点からも、読ませていただいて初めて知ったこともたくさんございました。
　そういう意味では、非常に多角的に、委員の皆さんに御意見をいただきながら、もちろん経営ということが大事なのですが、それ以外のことも含めて、御意見を賜れればと思います。

（山本委員）
　資料２の６頁を見ていただければわかると思うのですが、収支状況のところで、向日町競輪事業検討委員会の報告書が出た後、どのようになっているかというのが、この１０年余りここで見る限り、ずっと黒字基調にあります。それから、基本的には黒字基調がずっと続いているということを受けられて、包括外部監査の報告書で、廃止という問題は、もう考えなくてもいいのではないかということをおっしゃっているのかと思います。まさに１０年も経っておりますので、その点、いわゆる収益的にはきちんと黒字が出るような仕組みとして、売上を上げる方法ですとか、それから包括民間委託によってその経費も抑えられるというような状況が見えてきています。しかもこの６年間は、そもそもの競輪事業をやるという目的の一般会計への繰出もきちんとできているということを考えれば、続け

ていくというのは、包括外部監査人がおっしゃるとおり、なるほどというように思います。
　参考資料にも一部指摘がありますが、今後、続けていくことに対して、どうしていけばいいかを考える必要があります。先ほど、施設を御案内いただいたのですが、やはり非常に施設の老朽化が著しいということを感じました。包括外部監査の報告書でも、中期的には十分費用を見込めるということを記載していただいておりますので、その点を精緻に見ていきながら、施設を直して、継続していくというようなことが考えられるのではないかと思いました。

（川勝座長）
　今、包括外部監査の報告書にも言及いただきましたし、私の方からも改めてその点については言及させていただいたところですが、小長谷委員いかがですか。

（小長谷委員）
　私は実は、向日町競輪事業検討委員会に参加させていただきまして、その時は本当に、ものすごく厳しい状況だったのが、売り上げ等が劇的に回復したので、本当にうれしく思っているのですが、やはり山本委員から御指摘があったように、今後の中期的な計画として、本当に修繕だけでいいのか。それとも、建替をしないといけないのか。では、あらかじめ積み立てをしておかないといけないのではないかというところの必要性を感じました。
　また、地域貢献のところも非常に大切なことだと思います。地域への無償の開放も、確かに大事であると思うのですが、より収益面で、いろいろ今スポーツ、テニスなどもブームになっていたり、テニスコートがなかなか取れなかったりというのも聞いていますので、無償ではなくて、一般の方への有償の貸し出しなども御提案できないのかなと思いました。

（川勝座長）
　今日は、残りの時間を考えますと、本格的に議論する時間は限られているのですが、次回以降に向けて、委員の皆さんから議論を進めるに当たっての重要な視点・論点、そういったものをいただけたらと思っています。
　今、山本・小長谷両委員から御指摘いただいた点については、次回も含めて議論していかなければいけないと思います。包括外部監査の報告書の中では、向日町競輪事業はかつて廃止もやむを得ないとの指摘も受けたが、今日の動向を鑑みると存続すべきと結論付けられていることも受けて、山本委員からは、やはり存続の方向で議論を進めた方がいいのではないかという御意見をいただきました。
　小長谷委員からは、向日町競輪事業検討委員会の委員でいらっしゃったということで、その時からの御経験を踏まえて、競輪事業の運営について、もう少しこういう活用の仕方もあるのではという具体的な御意見もいただいたところですが、今後の議論の進め方として、大きく分けて２つあると思います。
　１つは、まず大きな方向性として、存廃という大きな課題について向日町競輪事業外部有識者会議として、どのような方向で議論するかということと、もう１つは、仮に存続という方向で議論するとなった場合に、どういった存続のあり方を我々は意見として出していくべきなのかという、マクロとミクロの両方の視点から御意見をいただけたらと思います。
　今日のところは、次回に向けて、こういった点が今後議論として重要ではないのかというようなことをそれぞれ御指摘いただけたらと思います。ここからは意見交換ということで、それぞれ委員の皆様から、まずは一言ずついただきたいと思います。

（徳廣委員）

私は北桑田高校の校長ですが、本校が自転車競技部の全国強豪校ということで、毎年全国優勝しております。全国大会総合優勝も３回しております。今年も順当にいけば、また優勝するのではないかと思っておりますが、本校の卒業生が大学でもチャンピオン、昨年、日本選手権でも優勝して、向日町競輪場でも選手がたくさんお世話になっております。やはり競技の側面を私は考えてみたいと思っております。競輪という事業があって、競輪場がもちろん存在するのであって、その収益をどう生かすかという話なのですが、一方で競技という部分がありまして、自転車競技という競技は、今もオリンピックにも当然競技としてありまして、競輪もオリンピック種目として、競技の種目として、世界大会・オリンピックにつながっております。

当然、競技としての裾野が、高校生から始めるのも多いのですが、小学生、中学生も競技をしております。その裾野があるから、競輪というのが、今こうしてずっと続いているのです。だから、高校で自転車を始めた子どもは、やはり大学でも続け、それから高校から直接競輪に行く子どもも含めて、競輪の選手がどんどん生み出される。ですから、競輪事業をこれからも存続して高めていって人気選手を出して、やはり地元のこの京都に、京都所属の人気選手が出るということが、非常に収益が高くなる理由にもなってくると思いますし、北桑田高校も、全部が全部、競輪選手になる訳ではありませんが、そういう意味での競技をしていく中で、競輪選手を育てていくという意味での貢献はあるのかなと思います。

やはり裾野を広げていくための競技という側面を、トラックの競技場ということで考えると、絶対に考えていかなければいけない。例えば、滋賀県の競輪場がなくなったおかげで、滋賀県の競技力は一気に衰退してしまいました。高校も複数校あったのが、瀬田工業一校だけになってしまいまして、この向日町競輪場まで練習しに来ています。大会も京都と一緒にさせてくださいということで、同じ日に別レースでやっております。本当に競技場がないと競技が成り立っていかないし、練習もできないし、一気に競技力が落ちてしまいます。

また、自転車競技は、実は日本人に非常に適していると言われていまして、どうしても競輪だけに目がいきますが、東京オリンピックでも梶原選手が銀メダルを獲りましたが、特に中距離のレースになりましたら、結構日本人の適性が高いのではないかと、非常に注目もされております。

当然、競輪選手もオリンピックに出られる訳ですから、そういう意味での競技としての魅力、モチベーションも、今非常に上がってきているのではないかと。その時に、やはりこの京都の地元に、ましてや全国強豪校の北桑田高校もある訳ですから、是非とも競輪場として存続はしていただきたい。その時に、やはり競輪という部分と、競技という部分を両方考えて、どれもが win-win になるような施設として存続してもらえたら一番ありがたい。それはなおかつ、自転車という競技だけではなくて、当然、施設として作るならば、地域にも貢献ができたり、私はどちらかというと、スポーツによる地域貢献、地域振興というのが専門でありますので、スポーツ協会にいたおかげで全部の競技団体の方々からお話を伺ったり、全市町村のスポーツ振興の関係者の方々とはお話をさせていただいておりますので、どの市町村が、どういうスポーツで、どういう課題があって、どういう施設が必要で、それからどの競技団体がどういう施設が足りないかという情報は、結構私自身持っておりますので、そういったことも考えながら、自転車という競技としての競技場の要

素と、それを他のスポーツとか、地域振興とも絡めて、同じ施設を、例えば新しくするならば、それをどう考えていくのかということも非常に大切になってくるのではないかと思っています。

それにプラス、スポーツだけではない地域振興に役立つ施設という考え方も当然出てくると思いますので、私もいろいろな都道府県の競技場、自転車競技場だけではなくて、様々な競技の施設が地域振興に関わっている部分であるとか、それから施設だけではなくてもこういうイベントを持ってくることで、それが地域振興につながるということも、例としては知っておりますので、そんなことも御紹介させていただきながら、競技の側面と、競技だけではなくそれがもたらす地域振興につながるような考え方ができたらいいと思っております。

実は、先々週（６月２５日～２６日）に南丹市美山町に、全日本の自転車競技のジュニア大会（２０２２ジュニア全日本自転車競技選手権大会ロードレース）を、今年引っ張ってまいりました。地域の宿が全部満杯になって、食べる所も満杯になって、本当に地域振興に役立っていると思っております。

それから、精華町と京田辺市で、国際ロードレース、ツアーオブジャパンの京都ステージというのも、私は少し関わってきたのですが、平日の月曜日に、５万人以上の人が全国から集まるのです。だから、自転車が持っている、潜在的な自転車に興味を持ってる人の数、日本だけでなく世界も含めてなのですが、かなり裾野が広いと思っております。そこが、もっと身近に、ロードレースだけではなくて、トラック競技も含めて知ってもらえると、その裾野のよさがもっともっと出てくるのではないか。当然、自転車の面白さ、トラック競技の面白さを知ったら、絶対に競輪にも興味を持ってもらえると思っておりますので、是非そういうようにつながるような施設として広がっていけばいいなと思っております。すみません、たくさん思いがありますので、長くなってしまいました。

（川勝座長）

単に競輪という側面だけではなくて、競技という側面、それから地域貢献に資する活動という側面、こういったものを併せ持って議論していく必要があるのではないかという御意見をいただきました。地元のお立場として、岡﨑委員お願いします。

（岡﨑委員）

向日市はわずか７．７２ｋ㎡、２ｋｍと４ｋｍしかない地域の中に、ど真ん中に競輪場があるということで、この競輪場ができてから、まちづくりと一緒に競輪が発展してきたというような思いは持っている。それは、経済的にも、雇用の問題でもいろいろあったと思いますが、これは廃止が方向付けされてから、「いつなくなるのかなぁ」というのが市民の話題になっていまして、もうあれから「どうなるんやろな」というのがおおかた１０年経ってきたのですが、ここでまた方向転換というか、もう一度検討されるということで、向日市にとって、向日市だけではないですが、この乙訓地域にとって、競輪場は今後どういう形で地域に、経済的なものも含めて、そしてまちづくりの観点から、施設の改修、また、そういうものができるかなという希望が少し湧いてきたのではないかなと。

これはどんな結論になるかわかりませんが、廃止になろうが、また存続という結論だろうが、地域にとっては、この地域の施設がどういう活用をされていくか、どういうものが作られていくかというのが最大の関心事になってきていますので、是非よい結論を導き出

して、施設が存続であろうが、廃止であろうが、地域の住民に親しまれる施設に生まれ変わってもらいたいという思いで、また発言をさせていただきたいと思います。売上、経営状況がどうというのは、なかなか私ども素人ですのでわかりにくいのですが、まちづくりの観点から発言させていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

（川勝座長）
やはり地元の皆さんからすると、この地域にこの施設があるということの重み、愛着というやはり特別なものがおありだということで、まちづくりと一体的にこの施設を何らかの形で活用していくという方向性で議論できたらという御意見をいただきました。
競輪そのもの、あるいは、競輪をベースにした様々なイベントとか、地域との関わりということについては、私も是非知りたいので、次回以降の会議でまた教えていただければと思います。

（奥野委員）
徳廣委員からもいろいろとお話がありましたが、まさに全国各地の競輪場が廃止になって、その背景も含めて、また、ミッドナイト競輪であったり、新たな形の競輪の競技、それがある意味、スポーツを楽しむという観点での事業として、付加的に転用してきた競輪事業だと思っています。
そういう意味でいくと、昔々昭和の終わりぐらいの競輪のイメージというのが、またもう一つ、ギャンブル性のところがあまりよいイメージがなかったのが、足元では大変健全で、かつ、そのクリーンなスポーツをいわゆる楽しむというようになってきている中で、京都府への一般会計の繰出ができる安定的な事業として、継続できる環境が足元１０年間整ったと。今後１０年間、先がどうかというところは誰もわからないのですが、一方、中村輪夢選手が、新たなＢＭＸという誰もが楽しめる自転車の先にある競技性のあるものも出てきて、大変面白いスポーツをベースに、地域振興と、かつ健康増進という観点でいくと誰もが楽しめるスポーツという背景もありますので、このあたりが地域の方に受け入れられてますます楽しめる、こういうものとして競輪、この競輪場が見直されるという方向性が大変期待できるのではないかと感じております。本当に子供たちも自転車に乗って、安全を整えた状況で、そういう場所で乗るという環境というのも、十分大切かなと思っています。
琵琶湖でいうと、ビワイチ（自転車で琵琶湖を一周する滋賀県の長距離サイクリングルート）、では京都はと、いろいろな地域で公道で楽しむレースというのもありますので、そういう背景に、この競輪場がその頂点にあるというか、そういう設備投資も含めて、存続を検討できるのではないかと考えています。

（川勝座長）
競輪事業が始まった頃に比べると、その競輪が持つ一種のギャンブル性というネガティブなイメージも、時代の変化とともに変わってきている。それから、自転車競技そのものが非常に多様化している。競輪事業は自転車競技の多様化とともに、健康増進、あるいはスポーツ振興にも資するような、そういう存在にもなってきている。また、非常に長期に渡ってこの事業が行われていますので、それを取り巻く背景、環境というものも随分と変わってきているということを踏まえた議論がこれから必要なのではないかという御指摘を

いただいたのかなと思います。
　発言は一巡したのですが、何か追加的にありますか。

（山本委員）
　地域貢献というお話が出てきていて、コロナで今できないという状況かもしれませんが、市民がかなりの人数集まるお祭りをこの場所で行っていることを知りました。これだけの人数が入れる場所というのは、この地域にはなかなかないのかと思いました。そういう意味で、地域のイベント開催が定着しているのであれば、再整備において、そういうことも含めた場所としてどのように使っていくのか。スポーツという観点もあるかもしれませんが、地域のお祭りだとかイベントなどでの活用を考えるべきだと思います。
　この自転車競技場の外側のスペースが、他の競輪場と比べて、思いの他広いという感じを受けました。敷地を有効にうまく使って、地域のイベント会場としていくことが考えられます。もう既にこれだけの方に来ていただいているので、競輪場に対する悪いイメージというのもあまりないのかと思うのですが、なかなか近づきがたいというイメージを他の地域では持たれている場合もある中で、地域で持たれている感覚を岡﨑委員にお聞きしたいところです。これだけ通常のイベントが行われていることを生かして、再整備によって非常に使い勝手がもしもっとよくなれば、非常にいい場所になるのかなと思いました。または他の種類の地域のイベントというのも、例えば土日の度に何かが行われているとか、そういうような使い方というのもあるのかもしれないなというのを、少しその可能性というのは非常に高いのではないかということを改めて思いました。

（川勝座長）
　競輪場は、地域の交流の場、例えば、お祭りやイベント、そういった地域の人たちが集まって交流するという場づくりというようなことにも活用できるのではないかという御意見をいただきました。
　では、私の方からも少しお話させていただこうと思います。今日、皆様から御意見をいただきまして、また冒頭に御紹介させていただいた包括外部監査の報告書でも、前向きなメッセージが強く打ち出されている。委員の皆様の中からも、何かうまく活用していくような方向性でという御意見をいただきました。
　ただ、競輪事業を存続するという場合には、やはりそれなりに条件を満たさないといけないと思います。
　１点目は、この公営競技という収益事業、その意義を今回改めて問い直す必要があるのではないか。そうした本質的な議論を、これを機に一度しておく必要があるのではないかということです。
　皆さん御承知のとおり、公営競技は、戦後復興の財源不足を補うために設けられました。また当初は、産業振興にも貢献するという意味合いも強かった。そういう意味では、当初の目的は一定果たし、その役割は終えたのかなと。では、もうこの事業は当初の役割を終えたので閉じましょうという話になるのか。今日皆さんからいろいろな御意見いただいた中にもありましたが、この競輪事業を取り巻く環境が大きく変わってきていることにも注目する必要があります。競技としての多様化ということもありましたし、スポーツ振興や健康増進、あるいは、まちづくりとしての取組など、競輪事業を公営事業として行う意義や役割が、地域貢献、社会還元という側面に、かなりウエイトがシフトしていくような、そういう時期に来ているのではないか。

これは、実はこの向日町競輪事業だけではなくて、全国にも共通して言えることではないかと思うのです。当初の役割としては一定果たしたが、今日、新たな役割がこの収益事業に与えられているという、そういう場面に直面しているのではないか。ただ、最終的にそれをどう判断するのかは、やはり地域の人たちではないかなと思います。実際、競輪事業の廃止という決断をしている地域もあります。

経営状況のＶ字回復ということも大きな背景としてありますが、それ以上に重要なのは、やはり地域の皆さんにとっての競輪事業の大切さというか、競輪場という「場」の大切さを考えたときに、存続して活用していくという方向、そういう新しいミッションが、この収益事業に与えられているのではないかということ。もちろん、京都府の財政に億という単位で貢献しているということが大きいということも確かなのですが、それだけではないだろうと思います。

２点目が、公益性の担保です。私のように今回初めて競輪事業について学びの機会を得たような人たちや、現時点でもよく知らない人が府民の皆さんの中にもいっぱいいると思うのです。ただ、知らないということが、魅力がないということではないので、そういう意味では、しっかりと、これが府営である以上は、府民の皆さんにその意義を共有していただくということが、事業を存続する上で大前提になるのではないか。それは、スポーツ競技としての魅力もそうなのですが、地域貢献に資する事業なのだということが、府民の皆さんの間で共有できているという前提が満たされる必要があるということです。

他方で、公営ギャンブルは公的に管理するということで、認められているという側面があります。奥野委員からも発言がありましたが、ギャンブルを公的に管理することで、そういう弊害、ネガティブな側面を最小限に抑制するということが、競輪事業を存続するということであるならば、非常に重要なポイントの１つになると思います。

その上で、やはり公営競技である以上、これまで以上に「透明性」と「安全性」の確保が求められると思います。包括外部監査の報告書を見る限りでは、特にお金の不適切な取扱いは見当たらないとのことでしたが、例えば、選手への賞金は今も現金手渡しであることなどについて、疑問が呈されている。不正の事実はなくても、不正が技術的に可能な状況をできるだけ作らないようにしなければならないということです。これは個別の論点ですが、例えば、そういったことの見直しも、存続に当たっては、検討しなければならないと思います。

それから、非常に施設の老朽化が激しいので、選手はもちろんなのですが、観客として来られる方、あるいは地域の交流活動として来られる住民の方々の安全性を確保しなければいけません。そういった点がしっかりと持続的に確保されることも、公益性を担保する上で重要だと思います。

また、今日皆さんの御意見の中で最も多かったのが地域貢献という側面ですが、中でも特に私が重要だと思いましたのは、人材育成です。徳廣委員からも、スポーツ人材のお話をいただきました。過去にも、この京都からたくさんの有望な選手を輩出されてきた。京都は自転車競技の強豪県で、向日町競輪場は高校や大学の自転車部の練習場にもなっていることが、包括外部監査の報告書の中でも言及されていました。京都という場で、そういう人材が育成されてきたという歴史そのものが非常に大切な財産でもありますし、そのことを断絶させてしまうようなことになってはいけないと思いますので、そうした意味も含めた公益性の担保というのは、事業存続に当たっての条件として極めて重要なポイントになるのではないか。

３点目ですが、仮に存続するといった場合には、先ほど小長谷委員がおっしゃっていましたが、単に老朽化しているものを補修して現状を維持するということだけでいいのか。

例えば、観客席の規模を今と同じ規模で維持する必要があるのか。自転車競技そのものだけではなくて、社会経済情勢が大きく変化してきています。人口が減少してきている。デジタル化がどんどん進んできている。昭和の初期の頃に比べると随分といろいろな条件、状況が変わってきていますので、それに応じた、リニューアル、活用のあり方をもっと追求していくことが必要ではないか。

具体的なアイディアについては、また今後の会議の中で、皆さんからたくさん御意見をいただければと思っているのですが、思いつきのレベルでも、既にいろいろな可能性があると個人的に思います。例えば、かつてはお客さんが競輪場にたくさん押し寄せて、競輪競技を観戦することが前提となっていましたが、今は時間や物理的な距離の制約で競輪場に来れない人たちがその限界を乗り越えて観戦できるデジタル技術が既に広がりつつあります。

そういう意味では、競輪場に来てライブでしか味わえない熱量を感じられる選択肢を一定保持しながら、デジタル技術を活用して日常的な観戦のアクセシビリティを高めるなど、ファン層の広がりを生み出すような仕掛けがこの競技の中でできたりすると、いろいろな可能性がまた生まれてくるのではないかと。この競輪事業でも、既にインターネットを通じて車券を購入するケースが大半を占めていますし、今後はもっと増えていくだろうと考えていきますと、ますますネット環境を使った映像の配信が主流になっていくことを前提とした施設のリニューアルと利用の仕方を追求していくことが求められる。そう考えていきますと、競輪事業にいろいろな可能性が広がっていきますし、また、その結果として、京都府財政にも継続的に貢献していくような事業になっていくのではないか。

今日、委員の皆さんからは、全体的に前向きな御意見をいただきましたので、仮に存続という大方針を、この外部有識者会議で共有できるのであれば、今、私が申し上げたような点にも御留意いただきながら、議論を進めていただければと思います。

（徳廣委員）

他にもいろいろと思っていることはあるのですが、私はいろいろな競技を知っている中で、競輪がらみで、やはり自転車競技はすごく恵まれている部分があります。一昨年、コロナでインターハイが全部中止になりました。その中で、私が全国の部長をしておりましたので、全国大会をどうしようかという時に、生徒達は練習してきて、もう試合がなくなってしまうのは、それはとんでもないことだったので、絶対に代替大会をしようと言って、向日町競輪場で代替大会、全国大会を開くことができました。

いろいろと言われました。投書があったり、電話がかかってきたりと。しかしながら、開催した時に、もう全部の参加者からお礼を言われました。よく開いてくれたと。

その時に、３日間ずっとライブ配信を YouTube 配信をしていただいたのですが、これはそんな簡単にできることではなくて、これは自転車競技で、向日町競輪場であるからできたのだなと思いました。全部の競技について、自転車競技が一番最初に、インターハイの代替大会を開きました。それを YouTube で配信して、毎日３万回の視聴があったのです。競技をやるのに、競技場に絶対３万人は来れないのです。

YouTube で配信したおかげで、逆にたくさんの人の興味、実はそこから今もうそれが当たり前になっていて、どの大会も YouTube 配信されるようになった。
それが自転車だけではなくて、陸上のインターハイとか全国大会も YouTube 配信されるようになってきた。

これは逆にコロナと自転車競技との融合の中で、新しいスポーツの捉え方ができたので

はないかと思っている。先ほど川勝座長が言っておられた話で、だから、ライブで観客が見るのもあるが、そうしなくても、また新しい考え方、それは競輪にとってもそうだろうと思いますし、そう考えると、競輪場の規模や観客席が今のように大きいものが必要なのかどうか、いらないのか。それでも十分楽しんでもらえるというのが考えていけるのかなと。それほど予算をかけなくても、また作る規模も考えられるのではないかと思っている。

それから、競輪が本当に潤沢であった頃に、すごくたくさんいろいろな補助金が出て、日本ではそういう経過の中で、スポーツにお金をかけないでもいいというような部分があるのですが、それも今時代が変わってくる中で、受益者負担で、やはりある程度負担を出してもらうというのが、一般的には少しずつ芽生えてきているのかなと。

やはり競輪で得た収益というのをどういう形で使っていくのか。その収益をいかに使っていくのかというのを明確にすることで、例えば、スポーツ振興なりに生かすことがわかっておれば、例えばｔｏｔｏもいろいろと論議されながら、今やはり非常に収益が上がっている。ある程度、目的がわかってきたら、スポーツ振興で関わるのであれば、自分も、競輪をやってみようかなとそういう意識はやはりあるのです。我々が、スポーツ振興に関わるのであれば、ｔｏｔｏをやってみようかなと意識しましたし、そういう考え方も、今後できるのかなと思います。

（川勝座長）

徳廣委員のお話は、競輪競技がいつでもどこでも、YouTube で観戦できるという選択肢が生まれる可能性があるということだと思います。

時には、やはりライブで、生の選手の吐息まで聞いて競輪競技を体感してみたいという時もあると思うのですが、しかし日常的にはそこまでしなくてもネット配信での観戦で十分という方もかなりいらっしゃるのではないか。今までその選択肢がなかったが、選択肢が生まれることによって、これまでやめておこうかなと思っていた人が、この競技を観戦してくれたり、車券を購入していただける機会を増やすことにつながっていくのではないか。

いずれにしましても、仮に事業を存続するといった場合に、これまでの形をそのまま踏襲するということを前提とせず、いろいろな可能性を追求していく。選手にとっても、観戦する人にとっても、誰にとってもハッピーになるような、そういう存続の方向性とか、もっと言えば、競輪がスポーツ競技として発展し、地域貢献にもさらに資するような、そういう向日町競輪場になっていくにはどうすればよいかを、次回以降も皆さんと議論できたらと思います。

今日は第１回ということで、今後議論していくための視点をそれぞれいただいたと思いますので、より具体的な議論につきましては、また次回以降、一つ一つ重ねていきたいと思います。そうしましたら、予定していた時刻になりましたので、本日は以上とさせていただきます。

（以上）